

## 映画を用いた総合英語授業の試み

眞 田 亮 子

### 1. はじめに

外国語教材のオーディオ・ビジュアル化は過去10年でめざましく進み、得に最近、娯楽用映画を語学教材として使用することが一般に行われるようになってきている。筆者も10年ほど前から英語の授業に教材として映画を取り入れるようになった。基本的にはリスニングの練習教材として映画のせりふを利用しているが、映画はそれ以外にもさまざまなタイプの科目に教材としての利用が可能であると考えに至った。本論では、映画の今日における英語教材としての位置付けを考察し、昨年から発足した目白大学外国語学部英米語学科における授業実践をあわせて紹介し、今後の方向性を提言したい。

### 2. 英語教育における映画使用の流れ

英語教育の現場で、映像を伴った音声教材が一般的に用いられるようになったのはさほど新しいことではない。古くはカセットテープを用いた音声のみによる授業が一般的であったのが、1980年代ごろから技術の進歩に伴い、VTRによる映像をともなった各種教材がさかんに制作され、使用されるようになった。このような教材は現在も引き続き使用され、改良が加えられているが、本論で取り上げたい「映画教材」とは、「娯楽用に製作され映画館で上映される映画が英語の教材として利用される」ものを指しており、このような試みが本格的に始まったのは比較的新しい、1990年代の前半であると思われる。

筆者自身が最初にこのような教授法を思いつき、実践に移したのが1997年であった。当時短期大学の英語英文科を教えていた筆者のところへ学科からの要請があり、「映画を教材とした英語の授業」を1年かけて検討することになった。このような動きの最大のきっかけは「学生の興味を喚起し、モチベーションを高める英語の授業を行うには、どのような教材が適当か」という、学生側のニーズへの対応であった。そして、「現代の学生は文字にはあまり関心を示さず、ビジュアルなものに反応する」という筆者の経験的な直感から、「娯楽映画」にターゲットを絞らせた。

実際スタートしてみるとこの授業は大きな反響と人気を呼び、その後様々な改良を重ね、教材の種類を増やし、他の科目にも応用を広げて今日に至っている。それら授業のテクニク的な細部は後ほど述べることにしたいが、筆者の10年の歩みと平行して英語教育界では娯楽映画の教材使用がしだいに浸透し、多くの実践的試みと研究が行われる一方、より実生活に近い言語材料としての映画の使用が英語教授のひとつの方法論として確立されつつある。それらの実践・研究の傾向を筆者

が知り得た限りでまとめると以下ようになる。

- (1) リスニング練習のための音声教材としての映画使用
- (2) 比較文化研究の材料としての映画使用
- (3) 文学の授業の補助として、取り上げる作品の映画化されたものを使用
- (4) 日本映画の英語字幕を用いて、英作文の演習を行う

これらの中で(2)と(3)は映画のダイアログの言語的側面よりも物語の内容や背景をビジュアル化したものとして映画を授業の素材として役立てることが目的であるので、英語の言語的スキルの向上を目指すものとしては(1)と(4)の使用法が主流を占めている。そして実際最も利用頻度の多いのは(1)であろうと思われる。

このような映画教材のメリットを踏まえて、筆者はこれまで主としてリスニングの授業で映画を使用してきた。次に、リスニング教材としての映画の利点と使用法についてまとめてみたい。

### 3. リスニング教材としての映画の効用

映画を教材とする利点についてはこれまで次のような点を多くの研究者が指摘している。

- (1) 本来娯楽提供を目的に作られているため、学習者の興味を惹きつけ、維持しやすい。
- (2) 英語学習を目的に編み出されたダイアログではないため、より自然な会話に近い英語である。
- (3) コミュニケーションの重要な補助要因である視覚からの情報を得ることができる。

これらは一般に広く認識されていることであるが、筆者はさらに重要なメリットとして、映画が「言語コミュニケーションには不可欠な context を効果的に提供できる」こと、これに関連して「内容が高度な物語性を持つために言語の表現形式に話者の感情を付加して習得するのが容易である」ことをつけ加えたいと考える。

言語使用における context の重要性は今まで様々に論じられてきた。Halliday は、context は常に text と結びついて機能するものとして、次のように述べている。

There is text and there is other text that accompanies it: ...this notion of what is 'with the text', however, goes beyond what is said and written: it includes other non-verbal goings-on-the total environment in which a text unfolds. (Halliday 1985: 5)

このような context の重要性は、語学教育の場でも十分に認識されなければならない。Kramsch は、外国語教育において学習者に教えられるべきものは、language system と cultural system の相互作用であるとし、それは常に context に依存する、としている。(Kramsch 1993: 11)

しかし、言語の実際の運用に際してこれほど重要な context が、英語教育の現場では必ずしも十分に提供されているとは言い難い。映像を伴った視聴覚教材においてさえ、ダイアログが交わされている場面を設定する程度にとどまり、登場人物の社会的立場や生い立ち、抱いている感情にまで踏み込んだ context を提供しているものは数少ないと思われる。この点において娯楽映画は従来の教材の欠点をすべて解決する強みを発揮する。

それと同時に登場人物に感情移入がし易いことにより、せりふの英語表現にどのような感情が伴っているかを学習者がより深く理解することができる、という利点もある。言語としての英語は記号や数式ではなく、人の気持ちを表現する手段でもある。その点を学習者により具体的に、実感を伴う形で学んでもらうのに、映画は有効な材料である。

しかしその一方で、いくつかのデメリットも指摘されている。角山照彦氏は、1980年代に娯楽映画が英語教材として着目され始めた当初から「映画のせりふの英語は学習者にとって理解するのに難しすぎるのではないか」という疑問が繰り返し提示されたと述べている。(角山：2005) 角山氏はこれに対する解決法のひとつがclosed captionであったとしているが(角山：2006)、なんらかの方法をもって理解不足を補わないかぎり、会話の完全理解というゴールの達成は難しいかもしれない。

筆者自身はこれまで様々な授業で映画を使用してきたが、語学の教材として映画のせりふを使用するにあたっては、授業の進め方について次のような枠組みを設定している。

- (1) 1本の映画のなかで、英語学習上重要なポイントがあると思われるいくつかの場面(10から12箇所、作品によって異なる)について、単に大意をつかむ聴き取りではなく、1語1句を確認するためのディクテーションを行う。
- (2) ディクテーションをした箇所については、日本語訳で意味を確認し、必要な文法項目の説明も行う。
- (3) ディクテーション箇所の語彙、熟語はすべて覚えるものとし、テストで学習を確認する。
- (4) 学習箇所の音読練習を行い、理解した音声 さらに深く定着するよう留意する。

この枠組みに従って、教材を作ってゆくのだが、はじめに手がけた基礎教育科目の English Through Films についてはすでに詳しく紹介させて頂いた。(眞田：2004)

今回、新たなサンプルとして目白大学外国語学部英米語学科1年生の Core Program2 の授業を取り上げてみたい。これは1年、2年次生の必修科目の Core Program (英語の運用スキルである listening, reading, writing, speaking を互いに教材のテーマによって連動させる授業) のリスニング部門である。平成17年の学部発足とともにスタートしたこの科目は、リスニングで使用する映画が持つテーマ性を他の技能のクラスで扱う教材に連動させることによって、4技能のクラスで学ぶ内容が互いに関連したつながりを持つように工夫されている。テーマのよりどころに映画を選んだのは、学生にとって親しみやすい媒体であり、扱う題材が多彩で長期間に渡って興味を持続させやすい、というメリットを重視してのことであった。

使用した映画はのひとつとして *Shall We Dance* を紹介したい。巻末の資料①、②が課題として使用しているプリントである。資料③は参考としてスクリプトを付けた。授業は各場面について、(1)内容についての推量、(2)せりふのディクテーション、(3)せりふの内容確認、(4)せりふの音読、の4つのステップから成り立っている。

授業はまず、教材の映画を見せることから始まるが、このとき「字幕」をどのように使うかが問題となる。先に、難易度の克服が映画使用の課題であると述べたが、字幕使用については角山照彦

氏の興味深い研究がある（角山；2006）同氏は映画使用のリスニング指導のモデルとして、字幕を使用する「ディクテーション型モデル」と、字幕なしで導入をはかる「3段階型モデル」の2パターンを比較し、結果として字幕を使用しないほうが、学習者のリスニング能力の向上が大きかったとしている。

この研究によれば、内容理解のための字幕依存は学習者の理解力向上にとってむしろ有害である、との結論が出ているが、筆者も初期には内容理解の助けになることを期待して初見では字幕つきで見せていたが、近年は字幕によって「日本語を介した英語理解」が助長されるとの危惧を感じ、授業の重点箇所については初見から字幕なしで見せ、ストーリーの進行を追うだけの場面では字幕を入れる方法に切り替えている。

授業では、字幕なしで該当の場面を3回繰り返して見たあと、guess work のための質問に答えてもらい、どのような場面かの概略を把握させる。

次に、ダイアログの穴埋めプリントを使って、音声を繰り返しきかせてブランクを埋める作業を行う。ブランクは学生の教材への慣れを考慮して、はじめは1語ずつ括弧を空け、慣れるに従ってフレーズまたはセンテンスごとのまとまりで空けるようにしている。ダイアログが埋まるとクラス全体で答えを合わせ、該当場面に限ってはすべてのせりふを一語一句確認できた状態を作る。この作業と平行して、せりふの意味を確認してゆく。使われている熟語の意味、重要な文法事項なども説明する。

このようにしてダイアログの語句の音声と意味が定着したところでもう一度音声を聞かせ、さらに映画での発話速度、リズム、イントネーションをできるだけまねするようにして音読の練習を行う。そして仕上げとして二人一組のペアを組み、ダイアログの実演を行う。

授業を進めてゆくと、学生の課題解決速度が速くなり、リスニング力の向上が自覚されるようになってくる。映画を素材とする最大の強みは興味を持続させられることであるが、時間の経過に伴う学生の「飽き」や「だれ」といった現象も他種の教材にくらべて少ないように思われる。また、ダイアログの音読による発音やリズムの練習も、映画の画面で視覚的なお手本を与えられているためか、ためらいや照れくささが少なくなるように思われる。実演させると、映画顔負けの感情表現をこめた「演技」を行うペアもあらわれ、それが他の学生たちへの刺激にもなり、楽しく授業をすすめることができる。

昨年度、春秋の2学期をとおして筆者のクラスを受講した1年次生19名の感想をまとめると、複数者に一致したものとして、まずメリットとしては、

- (1) 教材のストーリーが面白く、授業を楽しめた。
- (2) 実際の日常生活の会話で、興味をもって学習できた。
- (3) 英語だけでなく、アメリカ人の生活や文化を学べた。
- (4) 次回の展開が気になるので、途中で飽きることなく学ぶことができた。

などの意見が出された。一方、デメリットとしては、

- (1) 現地の生活や文化を知らない和理解できない部分がある。

(2) 学習項目が順不同にあらわれ、体系だった学習ができない。

(3) 登場人物には訛りのある人がおり、特に聞きづらい箇所がある。

といった意見が出された。これらのマイナスの側面はいずれも映画が学習教材として使われることを意図しないで制作されている以上致し方ないものもある。教材を選定するにあたってはできるだけこのような不都合の少ない作品を選ぶように心掛ける必要があるが、これらの欠点も含めて、「生の英語」の醍醐味であるとも考えられ、その兼ね合いは難しい。

#### 4. リスニング以外の映画教材の可能性

このようにして、リスニングの授業における映画教材の効用は実証されているが、映画教材の利点をさらにリスニング以外の領域に広げて利用することはできないかと考えてみた。

ひとつはリーディングへの活用である。これは従来から先に述べた Core Program において、リスニングで用いた映画のテーマに関連する題材をリーディングに取り入れるという試みを行っている。今後検討したいもうひとつの使用法として、映画のスク립トをそのままリーディングの教材として使用し、これをリスニングの授業と連動させることが可能ではないかと考える。

この場合1本の映画をリスニングの教材として使う部分とリーディングの教材の部分とに分け、互いに交代するようにプログラムを組んで授業を進めてゆければ面白い展開ができると思う。そこで重要なのは教材となる映画の選び方である。筆者は以前教材としての映画の選定基準を次のように紹介した。すなわち、

- (1) 公開時にヒットしたもので知名度が高く、多くの学生が一度見ている可能性の高いものである。
- (2) ストーリーの展開が分かり易く盛り上がる場面が作品全体に程よく散らばっている。つまり、毎授業時に少しづつ見て、次回への期待を持続させられる。
- (3) 過激な性描写や暴力、残酷なシーンがない。
- (4) ストーリーの展開に、せりふが重要な役割を果たしている。
- (5) 使われている英語表現の難易度が学習者に適切である。
- (6) 極端なスラングや崩れた言い方、方言による特殊なアクセントを含まず、学習者が「そのままねして構わない」英語が使われている。(眞田：2004)

しかし、これに加えて

- (7) Reading の教材としての使用に堪えるだけの語彙、文型などの種類を豊富に含むせりふがある。

を入れなければならない。これは実際問題としては容易ではない。学生たちのリスニング能力を考慮すると、あまりにリーディング向きの映画では難しすぎてしまい、逆にリスニング能力に見合うものはリーディングには材料不足であることもありうる。そこでこの条件を両方満たすものとして時代劇とアニメーションが考えられる。特に時代劇のせりふは語彙が多彩で文の構造が現代劇に比べて複雑である場合が多い。反面、崩れた発音やスラングが少なく、発話のスピードも速くない

ので聴き取りはさほど難しくないものが多い。

いまひとつ、映画の効果的な使用法は、その豊富な context を生かした「例文機能」である。目下筆者は実験的にいくつかの科目で英文法の説明や英作文の例文提示の際に、サンプルとして適切なせりふを含む映画の一場面を見せることを行っている。これは学習者の興味を喚起するにはかなり有効であり、これからさらに発展させたい分野と考えている。

## 5. 今後の方向性と展望

基礎教育の英語授業で始めた映画の使用は試行錯誤と発展を繰り返し、外国語学部の専門必修科目に舞台を変えて期待した成果をある程度あげつつあると思う。これまでは、どちらかと言うと、学生の興味と意欲を喚起することに重点をおいた映画教材の使用を行ってきた。その間に教材としての映像素材もしだいに質のよいものがあらわれるようになり、また昨今は e-learning の発達も著しい。このような状況の中で、われわれは常に英語教育の原点に立ち返り、「なぜ映画なのか」を問いなおす姿勢を持ちつづける必要があると感じる。リスニング能力の定着には、「意味がわかる音声」を「繰り返し聞く」ことが重要であり、聞くと同時に映像による視覚的インプットを併用することで、効果が高まることが期待できる。この作業を学生が意欲を持って取り組めるようにするために、映画の有効性は様々な研究によって確認されている。今後さらに利用の分野を拡げ、新しい用法の可能性を追求して行きたい。

## 参考文献

- Cook, G. 1989. *Discourse*. Oxford: Oxford University Press.
- Halliday, M.A.K. and Ruqaiya, H. 1985. *Language, context, and text: aspects of language in a social-semiotic perspective*. Oxford: Oxford University Press.
- 角山照彦 2005「日本における映画英語教育の流れ 1980年代の流れ」『映画英語教育研究』第10号 3-13  
映画英語教育学会
- 角山照彦 2006「日本における映画英語教育の流れ 1990年代前半の流れ」『映画英語教育研究』第11号 3-14  
映画英語教育学会
- 角山照彦 2006「映画を活用したリスニング指導の効果について」『映画英語教育研究』第11号 80-81  
映画英語教育学会
- Kramsch, C. 1993. *Context and Culture in Language Teaching*. Oxford: Oxford University Press.
- Ur, P. 1984. *Teaching Listening Comprehension*. Cambridge University Press.
- 眞田亮子 2000『ドラマで身につく英語の発想 ロングバージョン』アルク
- 眞田亮子 2000「英作文教育における視聴覚教材の可能性」『英語表現研究』日本英語表現学会
- 眞田亮子 2004「English Through Films 6年間の試み」『目白大学人間社会学部紀要 第4号』 167-172

## 資料①

*Shall We Dance (2) Guess Work Questions*

(Core Program2)

(1) What are the family doing?

- (2) What is John unhappy about?
- (3) Why does Jenna have her own phone?
- (4) Did the mother tell Jenna to stop talking on the phone?
- (5) What did John do at the end of the scene?

## 資料②

*Shall We Dance* (2)

(Core Program2)

Happy birthday to you, Happy birthday to you  
 Happy birthday, dear Dad  
 Happy birthday to you

John: Ohh, wow, Beautiful.

Beverly: All right, (①) ).

Jenna: Sorry, (②) ). Did you win?

John: "Take this call" ? She's 14. How can she be "taking calls" ?

Beverly: Jen, not now. (③) ).

John: Remind me, why was it (④) ) ?

Beverly: Emergencies.

Evan: Which this is, by the way. (⑤) ).

Beverly: Get off, Jen. Now, please, come on.

Jenna: All right.

Beverly: Come on, get off.

Jenna: Yeah, (⑥) ).

Bye.

All right, everyone, (⑦) ) ?

John: Thank you. Thank you. Thank you. Thank you very much.

Thank you. Thank you.

## 資料③ (参考)

*Shall We Dance* (2)

Happy birthday to you, Happy birthday to you  
 Happy birthday, dear Dad  
 Happy birthday to you

John: Ohh, wow, Beautiful.

Beverly: All right, make a wish.

Jenna: Sorry, I just have to take this call. Did you win?

John: "Take this call" ? She's 14. How can she be "taking calls" ?

Beverly: Jen, not now. Now's not the time.

John: Remind me, why was it we agreed to give her the phone?

Beverly: Emergencies.

Evan: Which this is, by the way. Serious problem over there.

Beverly: Get off, Jen. Now, please, come on.

Jenna: All right.

Beverly: Come on, get off.

Jenna: Yeah, my dad's just gonna blow out about a million candles.  
Bye.

All right, everyone, are we all happy now?

John: Thank you. Thank you. Thank you. Thank you very much.  
Thank you. Thank you.